

# 色麻のれきし

## 国指定史跡 日の出山瓦窯跡

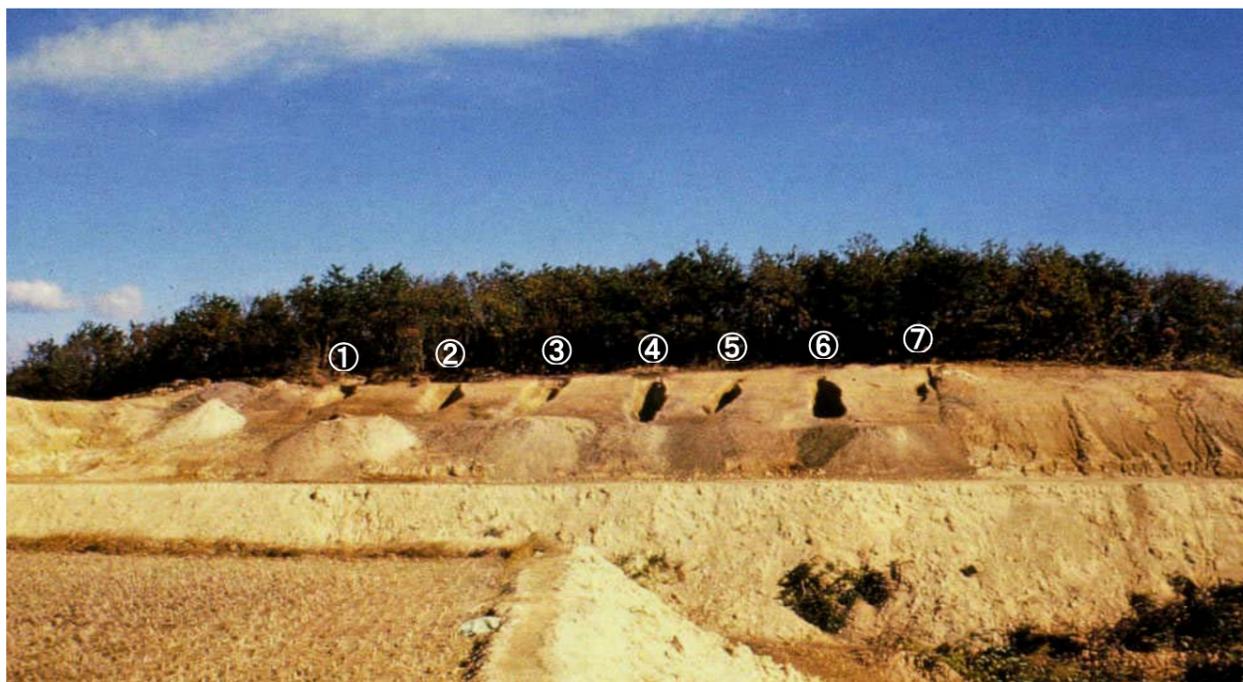


写真1 発掘調査された7基の窯跡

「日の出山瓦窯跡」は、今から約1,300年前の奈良時代初頭に瓦が生産された遺跡です。当時は律令国家による中央集権化が現宮城県域に及び始め、県内各地にその前線基地である「城柵」が築かれた時期でした。その中には陸奥国の国府「多賀城」も含まれます。

この周辺では古くから古瓦の破片が発見されており、研究者から注目されていました。そんな折、開田に伴う掘削により窯跡が見つかり、昭和44年に発掘調査が行われました。

調査の結果、7基の窯跡が並んだ状態で検出され、その内部には貯蔵、もしくは廃棄された大量の瓦と須恵器が残されていました。その中には建物の軒に葺かれる文様付きの瓦もありました。その文様は国府多賀城やそれに付属する寺院で発見された瓦と同じ「型」によって施されたことが確認され、それによって日の出山瓦窯跡が国府の瓦を生産した、いわば国営の窯跡であることが明らかになったのです。

また多賀城跡の発掘成果から、日の出山で生産された瓦が多賀城でも最古段階、創建時期のものであることが判明しており、その重要性から昭和52年に国の指定史跡となりました。

現代では瓦葺きの建物はそう珍しいものではありませんが、奈良・平安時代においては、役所や寺院など国の政策に関わる建物にしか葺かれませんでした。瓦は仏教とともに大陸から日本にもたらされたものであり、当時の仏教は国の政策と切りはなせないものだったためです。

この日の出山で焼かれた瓦もそのような建物で使用されました。現在分かっているのは、多賀城や多賀城廃寺のほか、本町にある一の関遺跡、加美町中新田の菜切谷廃寺、宮崎の東山遺跡などです。

また、現在までの研究成果から、日の出山では8世紀の初頭から半ばまで瓦を生産していたと考えられていますが、その工人は関東の諸国から移住させられた人々である可能性が高いこと、ある時期には奈良から工人がやってきて、瓦を生産したらしいということもわかってきました。

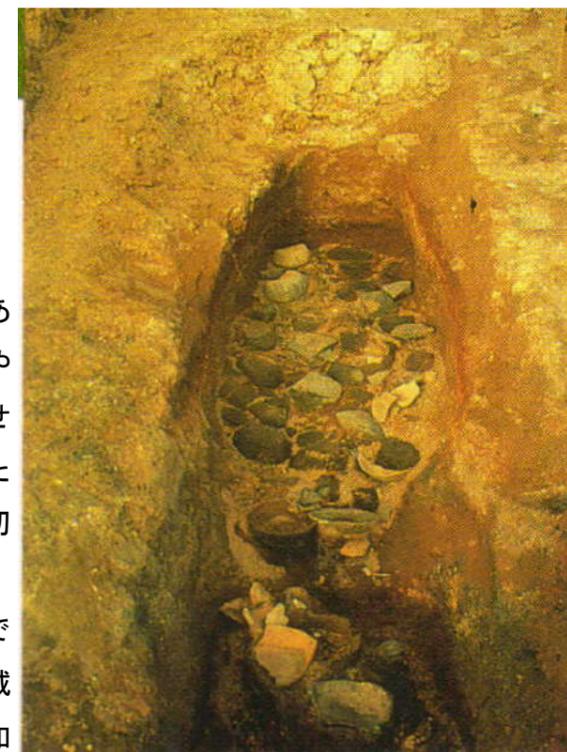


写真2 窯の内部と遺物

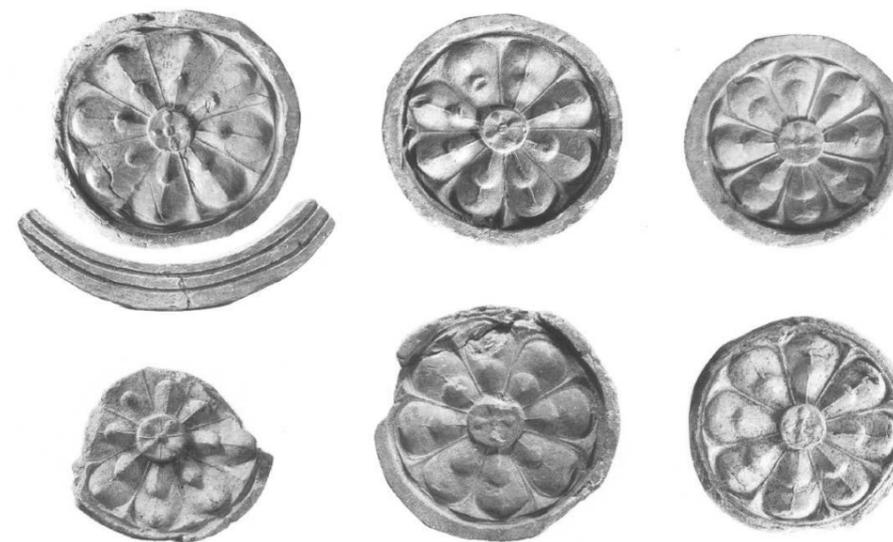


写真3 日の出山で生産された軒瓦